1996-2-6

日本とモンゴルと

モンゴルと聞いて何がイメージされるでしょうか。大草原、ヒツジ・ウマの群れ、チンギス=ハーン、あるいは民主化後の政治・経済の混乱でしょうか。日本とモンゴルは、13 世紀の元寇と 20 世紀はじめのハルハ河戦争（いわゆるノモンハン事件）をのぞけば、交流が極端にすくなく、日本人には「モンゴルはこうあってほしい」という思い入れが強いようです。これからモンゴル人とずっといっしょに生きていけるよう、いい関係をつくっていきたいと願っています。

モンゴルは豊かです。自然が身近にあり、季節ごとにハンティング、釣り、野いちご、きのこ狩りなどが楽しめます。人々はきびしい自然（厳寒の冬をすごせば、モンゴルの夏がなぜあんなにもすばらしいのかはっきり実感できます）と共生しつつ、四季を通じ精いっぱい人生をたのしんでいるようです。ただ、この自然もしっかりまもっていかなければ、うしなうことになってしまうでしょう。フブスグル湖の水質汚染、草原の砂漠化など環境問題も他人ごとではありません。

また、素朴で質素な地方の暮らしは日本人が自分を見なおしたり、日本のすぐれた点と異常さを発見するいい機会になるかもしれません。

現在、モンゴルには政治・経済・社会、あらゆる分野でさまざまな問題が山積しています。このため、日本人のなかにはモンゴルに対するイメージがこわされ、失望してしまった人もいるかもしれません。けれども 70 年におよぶソ連のくびきから脱してまだほんの 7,8 年にすぎません。この先、長い目で見る必要があるでしょう。また、多くの問題を解決するため世界中の国が支援していますが、その 3 分の 1 が日本からです。日本の援助について現地の新聞にはほとんど毎日のっています。国家レベルの交流は十分なはずですが「本当にモンゴルを理解してなされる心からの援助がほしい」という声もききました。さらにこれらの援助に対して「なぜこんなに援助してくれるのか」「遠くから来ていったい何をしてくれるのか」というある種の疑いのまなざしがモンゴル人にあることも事実です。おたがいの理解のため、さらに努力が必要です。こんな困難なときでも、国をよくしようと一生懸命がんばっている人がいます。こういう人々には最大の敬意をはらいたいと思います。あたり前のことですが、モンゴルのすべてが悪いわけではないのです。

最後に、モンゴル国が民主化して身近になったために、すっかり忘れられた中国・内モンゴル（面積はモンゴル国の 4 分の 3、モンゴル人人口はモンゴル国より多い 350 万人）、政治的・経済的に不自由なもうひとつのモンゴルにもすこし思いをはせてください。モンゴルはひとつではなく、中国各地、ロシアを中心としてユーラシア大陸にひろがっているのです。

とにかく一度モンゴルに来て、モンゴル人とアルヒ（酒）をくみかわし、おおいに語りあってください。モンゴル・サイハン（モンゴルはすばらしい）です。